

開館80周年記念特別展

国宝燕子花図屏風

色彩の誘惑

Special Exhibition Celebrating the Museum's
80th Anniversary

The National Treasure *Iris* Screens:
The Allure of Color



上色絵葡萄文大平鉢(部分) 肥前 日本・江戸時代 17世紀
下 国宝 燕子花図屏風(部分) 尾形光琳筆 日本・江戸時代 18世紀
いずれも根津美術館蔵

尾形光琳(1658～1716)の筆になる「燕子花図屏風」は、カキツバタという単一の植物を、全面に金箔を貼った大画面に、絵具としては群青と緑青のみを使って描いた作品です。制限されたモチーフと色彩が、韻律に富む画面構成をいっそう際立たせています。ふんだんに用いられた上質な絵具それ自体も魅力ですが、これら青と緑と金(黄)の三色は、しばしば組み合わせられて、日本・東洋の美術において特別な伝統を有する色でした。その一方、本作品の鮮烈な色彩感には、江戸時代ならではの美意識が反映しているとも見ることができます。

このたびの展覧会では、平安時代の紺紙金泥経や、青や緑を主調とする画面に金彩が加わって聖なるイメージがつけられる中世の仏教絵画、あるいは群青と緑青と金を用いて描かれた唐時代以来の金碧山水(青緑山水)などと、中国の華南三彩の色使いに通じる清新な古九谷や黄瀬戸など同時代の陶芸作品、さらには色彩傾向を同じくする金屏風の数々をあわせて展示することで、「燕子花図屏風」に新しい光を当てることを試みます。

2021年4月17日(土)～5月16日(日)

日時指定予約制

根津美術館 NEZU MUSEUM

<http://www.nezu-muse.or.jp>

根津美術館
NEZU MUSEUM



【展示室 1 & 2】

律動感を高める鮮烈な色彩

京都の高級呉服商・雁金屋^{かりかねや}に生まれた光琳は、文様と色に囲まれて育った。発色の良い高価な絵具を使う機会を得て、その心は高揚したに違いない。



かきつばたずびょうぶ おがたこうりん
 国宝 燕子花図屏風 尾形光琳筆
 紙本金地着色 6曲1双
 日本・江戸時代 18世紀
 根津美術館蔵

聖なる青・緑・金



背後にはこんもりとした御蓋山^{みかさやま}、緑豊かな春日野に抱かれた社殿。まっすぐ伸びる参道にほどこされた金泥は、ここが浄土であることを表す。

重要美術品
 かすがみやまんだら
 春日宮曼荼羅
 絹本着色 1幅
 日本・鎌倉時代
 14世紀
 根津美術館蔵



写経での染紙の使用は当初、防虫効果を期待するものだったが、やがて経典を荘厳するため、藍で青く染めた紙に金泥で文字を書くのが一つの典型となる。
 おんじにゆうきょう じんごじきょう
 陰持入経（神護寺経）（部分）紺紙金泥
 1巻 日本・平安時代 12世紀
 根津美術館蔵



せんざんろうかくずかん
 仙山楼閣図巻（部分）
 伝 趙伯驩筆
 絹本着色 1巻
 中国・明時代 17世紀
 個人蔵

群青と緑青と金を用いて描く金碧山水^{きんぺき}は、水墨画が成立する以前の装飾的な様式。中国では、古典的な趣を作品に与える技法として、また日本では、やまと絵山水の基本となった。

<コラム：「群青と緑青」>

「燕子花図屏風」の花に使われる群青^{らんどうこう}は藍銅鉱、葉に使われる緑青^{くじやくいし}は孔雀石、それぞれの鉱物を砕いて作られた岩絵具です。藍銅鉱と孔雀石は、ともに銅が水や空気に触れて変化した二次鉱物で、自然界ではふたつが混じり合って存在していることも少なくありません。そのため精製が難しく、とくに品質の良い群青は高価になります。



藍銅鉱 中国産 国立科学博物館蔵

金屏風に息づく色の伝統



しき たけずびょうぶ
四季竹図屏風
紙本金地着色 6曲1隻
日本・室町時代 16世紀 個人蔵

四季のうつろいと循環する時間を、常緑の竹に託して描く。無背景の金地に単一植物を描く屏風の始まりは、室町時代のやまと絵に求められる。



うじ ずびょうぶ
宇治図屏風 紙本金地着色
2曲1隻
日本・江戸時代 17世紀
根津美術館蔵

名所はしばしば社寺を擁する。近世の名所風俗図屏風の色彩は、中世の宮曼荼羅のそれを受け継いでいると見ることもできる。

やきものにおける新しい色彩感



いろえぶどうもんおおひらぼち ひぜん
色絵葡萄文大平鉢 肥前 1枚
日本・江戸時代 17世紀
根津美術館蔵

青や緑の寒色に鮮やかな黄色が映えるやきものは、中国の華南三彩の影響を想像させる。「燕子花図屏風」と同じ三色が、ここではエキゾチックな魅力を発している。



きせ とほうじゆこうごう
黄瀬戸宝珠香合
みの美濃 1合
日本・桃山時代
16世紀
根津美術館蔵



そめつけゆきわすいせんきくもんざら
染付雪輪水仙菊文皿
ひぜん なべしまはん
肥前・鍋島藩窯 1枚
日本・江戸時代 17世紀
根津美術館蔵

17世紀初頭に始まった伊万里の磁器、ことに染付は、生活に青いやきものを根付かせた。染織の雪輪文様と草花を組み合わせさせた意匠も斬新である。

ベースの黄色にしばしば緑がアクセントになる黄瀬戸の洒落た色彩感も、江戸時代前期の美意識が反映していよう。緑地に黄色が映える、舶載の華南三彩の配色を逆にしたようにも見える。

【展示室 5】上代の錦繡綾羅 きんしゅうりょうら

技術の高さのみならず技法の多様性においても、他の追随を許さない 7 世紀から 8 世紀の染織品。当館が所蔵する法隆寺および正倉院の伝来品にその輝きを見ます。



みどりじそうかもんししゅう
緑地草花文刺繡 1 枚 絹
日本・奈良時代 8 世紀 根津美術館蔵

三角形の緑の綾地に華やかな唐花風の草花文を刺繡であらわす。仏殿の内部を装飾する幡とよばれる荘厳具の一部（幡頭）であった。



あかじこうしれんじゆほなもんにしき しよこうきん
赤地格子連珠花文錦（蜀江錦） 1 枚 絹
中国・隋～唐時代 7 世紀 根津美術館蔵

鮮やかな紅地に繊細な格子蓮華文を織り出す。中国四川省の蜀地方は、古代より錦の産地として名高く、特に日本では紅地の絹織物が「蜀江錦」として珍重された。

【展示室 6】燕子花図屏風の茶会 —昭和 12 年 5 月の取り合わせ—

当館のコレクションの基を築いた初代・根津嘉一郎（号 青山、1860～1940）が、昭和 12 年（1937）5 月の初風炉の茶会で「燕子花図屏風」と共に取り合わせた茶道具をご覧ください。



重要美術品
あまもりちやわん みのむし
雨漏茶碗 銘 蓑虫
1 口 高麗茶碗
朝鮮・朝鮮時代 16 世紀
根津美術館蔵

薄茶席のひとつ目の茶碗として用いられたのが、「蓑虫」の銘を持つ本碗である。「雨漏」と呼ばれる、長年の使用によりあらわれた沁みが見どころ。



なりひらまきえずりばこ
業平時絵硯箱
おがたこうりん
伝 尾形光琳作
1 合 木胎漆塗
日本・江戸時代 18 世紀
根津美術館蔵

扇面に狩衣姿の在原業平が時絵などであらわされた硯箱。光琳作として知られることから、茶会終了後、母屋での饗宴の席で「燕子花図屏風」と共に並べられた。

その他の情報

夜間開館

5 月 11 日（火）から
5 月 16 日（日）は
午後 7 時まで開館。
（入館は閉館 30 分前まで）



庭園のカキツバタ

作品の鑑賞とともに、カキツバタの咲く庭園の散策もお楽しみください。（例年 4 月下旬から 5 月上旬にかけて開花します。）



開催概要

展覧会名	開館 80 周年記念特別展 「国宝 燕子花図屏風 一色彩の誘惑一」 日時指定予約制	ご来館前日までに当館ホームページより日時指定入館券をご購入ください。 (根津倶楽部会員、招待はがきをお持ちで入館無料の方も予約が必要です。)
主催	根津美術館	
開催期間	2021 年 4 月 17 日 [土]～5 月 16 日 [日]	
開館時間	午前 10 時～午後 5 時 夜間開館： 5 月 11 日(火)～5 月 16 日(日)は夜 7 時まで開館 (入館はいずれも閉館 30 分前まで。)	
休館日	毎週月曜日、ただし 5 月 3 日 (月・祝)は開館	
入館料	オンライン日時指定予約 一般 1500 円 (1300 円) 学生 1200 円 (1000 円) 当日券〈窓口販売〉 一般 1600 円 (1400 円) 学生 1300 円 (1100 円)	
	※当日券は、予定枚数の販売が終了している場合があります。 ※()内は障害者手帳提示者及び同伴者 1 名の料金。中学生以下は無料。	
アクセス	地下鉄銀座線・半蔵門線・千代田線〈表参道〉駅下車 A5 出口 (階段)より徒歩 8 分、 B4 出口 (階段とエスカレーター)より徒歩 10 分、B3 出口 (エレベーターまたはエスカレーター)より 徒歩 10 分	
住所	〒107-0062 東京都港区南青山 6-5-1	
お問合せ	根津美術館 学芸部広報課 Tel. 03-3400-2536 (代表) website http://www.nezu-muse.or.jp	

広報制作物のメール配信のお知らせ

当館の広報制作物のメール配信を開始しました。従来の郵送から、メール配信への切り替えをご希望の方は、根津美術館広報課 (press@nezu-muse.or.jp) へどうぞお知らせください。なお、郵送とメール配信の併用はご容赦ください。

次回展 企画展「茶入と茶碗 —『大正名器鑑』の世界—」
2021 年 5 月 29 日 (土)～7 月 11 日 (日)

茶道具図鑑の大著『大正名器鑑』の編者・高橋箒庵と、根津美術館の礎を築いた初代・根津嘉一郎は盟友でした。本書掲載の嘉一郎旧蔵品を中心に茶入・茶碗の名品を展観します。



高橋義雄 (箒庵) 編
『大正名器鑑』(初版本)
日本・大正 10 年～昭和 2 年 (1921～27)
根津美術館蔵



重要文化財 肩衝茶入 銘 松屋
福州窯系
中国・南宋～元時代
13～14 世紀 根津美術館蔵